

## FD勉強会

### 「学生主体」の授業デザインと運営手法ワークショップ 11月3日

昨年11月に中教審から答申された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、我が国の高等教育が目指すべき姿として、大学・教員が「何を教えたか」から学生が「何を学び、身に付けることができたのか」へ転換することの重要性が再確認されました。そこでは、学生個人個人の学修の達成状況が、教員・学生双方で確認できることが前提となるため、個々の教員には、学生が主体的に学ぶことができるような授業設計・運営をする能力が求められることとなります。

今回のFD勉強会では、講師育成会で有名なブ・パイク・メソッドの日本における第一人者である中村文子氏にお越しいただき、研修会を開催しました。「人はどのように学ぶのか」を基本に構成された氏のワークショップは、終始「参加者主体」で進められ、参加者が実際に「考え・動き・言語化し・協働する」活動をと



おして、「パフォーマンス向上」「知識結合」「学習内容記憶の向上」のための具体的な手法を、体感しながら自然に身に付けられる工夫に満ちていました。参加者の笑顔が絶えぬ和やかな雰囲気の中で行われ、参加者各々が具体的なものを持ち帰ることができた素晴らしい研修会であったと確信しています。

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
Q1テーマ・内容	18	1	0	0	0
Q2講師の資料	17	1	1	0	0
Q3WSの活動	16	3	0	0	0
Q4期待した知識	12	6	1	0	0
Q5自己の収穫	16	1	0	0	0
Q6活用可能性	15	2	0	0	0

参加者20名(M1,A1,I2,V1,B1,L1,U5,Kせ5,機構2,職員1)

おして、「パフォーマンス向上」「知識結合」「学習内容記憶の向上」のための具体的な手法を、体感しながら自然に身に付けられる工夫に満ちていました。参加者の笑顔が絶えぬ和やかな雰囲気の中で行われ、参加者各々が具体的なものを持ち帰ることができた素晴らしい研修会であったと確信しています。

## 教育力向上ワークショップの開催 7月～10月

第3～5回教育力向上ワークショップが、以下の日程・内容で開催されました。

開催日・テーマ・活動概要	アンケート集計結果				
	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
7月11日・8月2日 第3回ワークショップ 「ティーチング・フォロ入門(初級:チャートの作成)」 受講者の活動: ①教育活動をTPチャート上で俯瞰しつつ、 自己の教育理念を導き出す ②教育理念と方針・方法の結びつきを検討し、 長期目標・短期目標を設定する	15	2	1	0	0
7月25日 第4回ワークショップ 「manaba活用入門」 受講者の活動: ①manaba-folioのフォーム入力・ ファイル送信レポートを試行する ②manaba-courseの小テスト機能を用いドリル・ 自動採点小テストを設定し、成績機能を試行する	3	1	0	0	0
10月18日 第5回ワークショップ 「授業における知的財産法入門」 受講者の活動: ①授業で使う著作物の扱いについて 自己の取組を基本として理解する ②授業で使った著作物を授業以外で使う場合の 注意点を理解し、正しく対処できるようにする	18	8	0	0	0

今年度の「教育力向上ワークショップ」では、新規採用の先生方を中心にリピートされる方も増えてまいりました。次回は2月21日(金)に「主体的な学修を支援する評価方法;ルーブリックの作成と活用」を開催する予定です。

「大学全入」時代にあって、「選り好みしなければ大学に行ける」などという、少々心ない、ともとれる言葉が高校生や高校に寄せられます。かつて県立高校にいて、来校された方が、決して悪気はないのですが「進学しやすくなって、生徒も先生も楽でしょう」などと言われると、教員は様々考慮して進路指導にあたっていること、「簡単になった」と言われるからこそ生徒はプレッシャーを感じていること等をお伝えもしました。

2017年、県立高校10校の教員を対象として入学前教育・初年次教育に係る調査を実施し、2018年には同じ10校の生徒の協力を得て、教員対象とほぼ同内容の調査を実施しました。調査内容および回答状況は「報告—入学前教育・初年次教育調査について」(1)～(4)を『教育開発センターニュース』に掲載しています。(http://www.kanagawa-it.ac.jp/~14015/)

今回は1 高大接続に係る高校の状況、2 教員の危機感が示される入学前教育への期待の観点から、次号では、3 大学教育を達成する上での初年次教育の観点から本報告をまとめていきます。

## 1 高大接続に係る高校の状況

高大接続改革は、「高大接続システム改革会議 最終報告」(2016.3)に示されるような高校教育改革と大学教育改革に見られる学習(学修)内容の改革—受動的な知識・技能の獲得から能動的な活用能力、アクティブ・ラーニング(高校では「主体的・対話的な深い学び」)—が主たる改革点であり、調査項目も高校および大学の学習(学修)に関わるものを用意しました。高校の校長、進路担当教員の聞き取りでは、おもに入試制度の改変を見据えた生徒の意識等についてお伺いしました。

### (1) 校長、進路担当教員とのやりとり

- ◆ 昨年来、「生徒の安全志向が高い」と高校の校長や進路担当者から聞くことができました。要因の一つは、大学入学者定員の厳格化ですが、より大きな要因は大学入試の改変が間近になったことへの生徒の不安感です(BenesseグループのBetweenセミナーでも連続して語られています)。一方で進学希望者の多い高校を中心に「大きな変化なし」としていることから、高校の受け止めの基本は「大学の門戸が拡大した」ということでよいと思われます。
- ◆ 高校教育改革、大学教育改革、高大接続改革は教育のあり方の改革が主眼でありながら、学校の現場以外では入試改変に注目が集中します。その一番、二番の売り(良いことはどうかはさておき)が頓挫しました。民間試験による英語4技能試験が「新学習指導要領適用となる2024年度実施に向けた検討」、共通試験における国語・数学の記述出題が「現時点では見送り」になりました。教育行政が生徒、教育現場を混乱させています。

### (2) 入学前教育についての文科省の例示 (高等教育局大学振興課大学入学室発出のFAQ)

#### 3-5-1 入学前教育の充実を図るために、どのような方策がとられるのでしょうか

早期に合格が決定した後の学習意欲を継続する観点から、以下のような内容を促進することとしています。

- ① 特に12月以前の入学手続き者に対しては、入学前教育を「積極的に講ずる」こと。
- ② 各高等学校においても、大学と連携し学習意欲を維持するための必要な指導を行うよう努めること。
- ③ 学校推薦型選抜の場合、合格決定後も、高等学校の指導の下に、高大連携した取組を行うことが望ましい。  
(例：入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況等を高等学校から大学に報告させる等。)

(2018.6 登録)

- ◆ 聞き取りに際して上記FAQを校長にお見せしました。日頃教育委員会から校長に伝わるのは初等中等教育局発出の資料です。この資料が高等教育局発出ということから、皆さん初見とのことでした。
- ◆ ②、③について校長からは、大学から高校を通じて入学前教育課題と、入学までの学習計画記入用紙を生徒に配付し、記入した課題や学習計画書については教員検印ののち大学に返送というような緩やかな協働ならば対応は可能という印象を得ることができました。

## 2 教員の危機感が示される入学前教育への期待

### (1) 入学前教育の対象に係る調査結果から

(表 1)

	1	2	3	4	1+2	
AO 入試合格者	80.2%	14.3%	2.1%	3.4%	94.5%	1 思う
推薦入試合格者	77.2%	16.9%	2.5%	3.4%	94.1%	2 どちらかと言えば思う
一般入試合格者	17.9%	18.3%	32.3%	31.5%	36.2%	3 どちらかと言えば思わない
						4 思わない

この項目に限らず、教員調査、生徒調査では一つひとつの質問に対して1~4から選び回答する形にしました。

例えば「入学前教育を行う必要の最も高いのはAO入試合格者・推薦入試合格者・一般入試合格者のうちどれか」という問い方はしていません。また1と2の選択具合の違いに回答者による程度の差が想定できることから「1+2」を「肯定」として概観しています。

- ◆ (表 1) は入学前教育の対象についての教員調査の結果です。設問は「AO入試合格者には入学前教育が必要だ」、「推薦入試合格者には入学前教育が必要だ」、「一般入試合格者(センター利用を含む)には入学前教育が必要だ」の3問です。AO、推薦入試合格者について、ほぼ全教員が「必要だ」としています。
- ◆ 高校では、早期に進学先の決まる生徒の大学入学までの学習習慣継続を懸念しているため、かねてから入学前教育に期待を寄せていました。表に示された数値は想定どおりでした。(一般入試の36.2%は想定以上です)

### (2) 入学前教育の内容に係る調査結果から

- ◆ 学習習慣が継続しないことにより、早期に進学先を決定する生徒の高校卒業時の基礎学力が不足することから、高校の教員の入学前教育に期待する効果として、高校までの学習内容の復習による基礎学力補強に高い肯定度を示すことは調査実施前から十分に想定できました。入学前教育に期待する効果については教員、生徒ともに7問を用意しましたが、ここでは2問についての教員回答を再掲します。

(表 2)

	1	2	3	4	1+2
学習習慣、学習意欲の維持、向上に努める	66.9%	22.5%	5.5%	5.1%	89.4%
高校までの既習学習内容について復習し学力を補強する	67.4%	23.7%	5.5%	3.4%	91.1%

- ◆ (表 2) のとおり、高校までの既習内容の復習による学力補強にほぼ全教員から肯定回答を得ました。(表 2) にあげた2つの質問については、「1+2」が90%程度あって、他の質問に比べて肯定回答が多いことに加え、明確に「思う」と回答した教員が多いことが特徴的でした。

- ▼ 11月1日、民間試験による英語四技能検査の延期発表、12月17日、共通テスト国語、数学の記述問題出題白紙化。勿論この原稿の書き換えを余儀なくされました。書き換え作業は大した話ではありません。混乱の渦中にある高校生(特に現2年生、先を読んだ制度が変わるときに浪人できないと強く意識した現3年生)にとって大きな問題です。
- ▼ 講義型を脱して、グループによる生徒の探究や発表を取り入れた形にしていこうとする高等学校学習指導要領の改訂が既に20年前の改訂から行われてきています。地歴公民科という工科大学とはあまり縁のない教科ではありますが、これに携わり、告示後は国立教育政策研究所で学習指導要領に基づく授業と評価基準の作成にあたることで、多少なりとも「高校教育改革」や「アクティブ・ラーニング」という語に早く接することになりました。18歳人口の減少により、基礎学力の低い生徒が大学に進学することから、高校、大学双方の教育改革および入試制度改変による高大接続改革は、多少の無理はあっても必至の政策と考えることができましたが、受験生、高校、大学に混乱をきたす朝令暮改状況で、もはや説得力を持たないと感じ取っています。
- ▼ 送り出す責任、授業成立の可否から、高校にも危機感があります。そのことを数値として可視化し、入学前教育における協働に繋げる資料を作成することと、高校現状を踏まえた初年次教育という、先生方がすでに考えておられることを側面から補強することを旨として実施した調査。次回、DP実質化の一環としての初年次教育の視点で、この報告の最終回とします。



## 【連載】アクティブ・ラーニングの手法：第6回「KP法」紙芝居プレゼンテーション

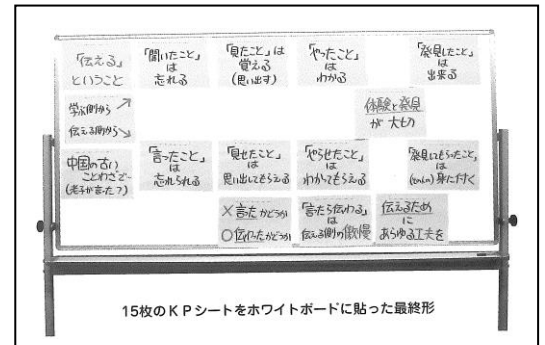
「授業で話していることが、全然わかってないんだよね...」「授業でやってることをテストに出してるのにね...」「こちらは、ちゃんと話してるのに通じない...」「本当に今の学生は...」

この「話しても伝わらない今の学生話」は大学教員の集う場（キャンパスの片隅やあまり人のいない時間の学会休憩室）での無難な挨拶の話題として、すっかり定着した感さえある今日この頃です。社会の変化（「大学の大量化」）や学生のデジタルネイティブ化など、その要因はいろいろと考えられるでしょうが、今の子どもたちは（我々と多くのものを共有しつつも）異なる価値観・方略を基本に学修する人間であり、「私達の世代を教えるために設計された古い教育システム〔教育方法〕は機能しない」（プレンスキー、p.39）ということでしょう。

教壇で「言ったら伝わる」時代は終わりました。さあ、「伝える」ために何をすべきか一緒に考えましょう！

### ■ 「KP法」って何だ

「KP法」は「紙芝居（K）プレゼンテーション（P）」の略で、環境教育家の川嶋直氏が考案しました（本人は否定していますが）。方法はいたって簡単です。キーワード（イラスト）を書いたシート（A4用紙に手書きで20字以内）を話の展開にあわせて黒板（ホワイトボード）等に貼りながらプレゼンを行っていきます。1回のプレゼンは10～15枚の紙で3～4分にまとめ、それを紙芝居の要領で話の流れに乗りながらペタペタと貼っていくのです。



テキストだけでその実際と効果を皆様に伝えるのは難しいので、you tubeにある「KP法動画シリーズ」を是非ご視聴ください。シリーズ①の「伝える」ということ（3:33）は川嶋先生ご自身がKP法の説明をKP法で行っておりますので、その方法と効果が実感できるはずですよ。動画での最終形を図で示します（川嶋、2013、p.21）。図中左上「伝える」ということ から始まり、ペタペタ貼りつつお話ししながら右下の「伝えるためにあらゆる工夫を」に至ります。

### ■ 「KP法」の利点と弱点

以下、簡単に「KP法」の利点と弱点をあげてみましょう。

#### 【利点】

- ①情報量が少なくシンプル  
あえて情報を削り本当に伝えたいことが伝わる
- ②話す内容と貼るシートの言葉がシンクロ  
今話していることが見える化（ライブな迫力）
- ③シンプルなレイアウトにより構造が明確  
論理の構造がパスとともに俯瞰できる

#### 【弱点】

- ①大人数には向かない  
書画カメラ上で操作する等、技はあります
- ②写真や細かい図はパワポに敵わない  
デフォルメした手描図もいいものですよ
- ③風で飛ぶ！  
教室では関係ないかも

### ■ 授業で活かそう

話者側の利点も大きいです。プレゼンを準備していく（シートの作成）過程が、要点と論理展開を構造化していく過程でもあるため、思考整理法としても利用できます。また、出来上がったシートを並べてみることで、他者視点で自己の論理の問題をチェックすることもできるでしょう。

ゼミや卒論・修論指導で学生・院生に「KP法」を使わせてみてはいかがでしょうか。教室の大きな黒板を使うことで、複数名の報告を比較出来ますし、論理の構造が簡潔に示されますので問題点に対する指導も楽になりそうです。パワポと違って現れては消えるわけではないので、学生・院生をまじえての質疑応答や事後検討もやりやすそうですね。

さあ、早速動画を見てみましょう。これからの5分間があなたの授業と学生たちの人生を変えるかもしれませんよ！

参考文献 川嶋 直『KP法：シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版、2013年  
プレンスキー、M（藤本徹訳）『テレビゲーム教育論』東京電機大学出版局、2007年

あとがき：大学入学共通テストの改革は遅れそうな状況ですが、初等中等教育の教育改革は着々と進んでいます。大学でも、これまでの「教員はどう教えるか」から「学生はどう学ぶか」へと考え方も変わっていくのだと思います。今回の内容もこれらに関係しているもので、今後もこの観点での話題を提供していく予定です。（所長 井上哲理）

\*問合せ先：教育開発センター（KAIT HALL 2F, edc@kait.jp） \*バックナンバーはセンターホームページで。